

省力でもとことん高品質にこだわり、築き上げた

大江の「おしんの里」すいかブランド

大江西瓜部会 部会長 清水 利夫（大江町）

## 1 受賞者の概要

大江町は、従来りんごやラ・フランス中心の果樹地帯であったが、夏季に収入が得られる品目として、昭和50年頃から15名程度ですいか栽培が始まり、平成7年に、農協の合併を契機に大江西瓜部会が発足した。

平成29年度は、生産者11名で栽培面積は約12.3ha、販売量は約320t、販売金額は5,900万円であった。品種は大玉「甘泉」主体で、小玉「姫甘泉」は10%以下となっている。

## 2 特色ある活動

### (1) 密閉栽培の導入と大江流密閉栽培へ

栽培開始時は、キャップをかぶせただけの栽培であったが、山形県が開発したすいか密閉栽培を導入してから栽培が安定し、7月中の出荷が可能となった。その後、密閉栽培の中でも手間がかかるつる管理を改良し、通路を広く取るようにした。

その結果、すいかの畦間に軽トラックを乗り入れての収穫、スピードスプレヤーを使った防除など、さらに省力が可能な大江流密閉栽培を確立した。

例年、出荷期間は7月15日～8月25日で、うち7月25日から8月10日がピークとなっている。

### (2) 徹底した高品質化への取組み

有機質肥料を主体とした施肥設計、栽培マニュアル作成等、技術を統一し栽培技術の向上を図っている。また、巡回時には全員の糖度と食味をチェックし、基準に満たない場合は個選にすることもあり、厳しく高品質生産にこだわっている。

### (3) 若手生産者の加入と指導

近年、20～40代の若手生産者が、すいかの手伝いや生産者の話を通じて、すいか栽培に魅力を感じ、栽培を始めている。部会では、熟練者によるマンツーマン指導を行っており、1haを栽培している人も出てきている。平成30年度は定年帰農者や若手が加入し、部会員は13名となった。

## 3 今後の発展方向

部会発展のために、若手生産者の技術向上を図っていく。また、省力的な栽培方式であるため、一戸当たりの面積拡大が可能であるが、全員が同じ品質のものを生産できるよう引き続き指導体制をしっかりとっていく。

